

7.5 [木]

第580回 定期演奏会
サントリーホール/19時開演
Subscription Concert, No. 580
Thursday, 5th July, 19:00 / Suntory Hall

指揮/小林研一郎 (特別客演指揮者)

Special Guest Conductor KEN-ICHIRO KOBAYASHI P.4

ピアノ/エリソ・ヴィルサラゼ Piano ELISSO VIRSALADZE P.6

コンサートマスター/長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

ベートーヴェン **ピアノ協奏曲 第1番** ハ長調 作品15 [約36分] P.7

BEETHOVEN / Piano Concerto No. 1 in C major, op. 15

- I. Allegro con brio
- II. Largo
- III. Rondo : Allegro

[休憩 Intermission]

チャイコフスキー **マンフレッド交響曲** 作品58 [約57分] P.8

TCHAIKOVSKY / Manfred Symphony, op. 58

- I. Lento lugubre
- II. Vivace con spirito
- III. Andante con moto
- IV. Allegro con fuoco

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会
[協力] アフラック



7.28 [土]

第208回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール/14時開演
Saturday Matinée Series, No. 208
Saturday, 28th July, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

7.29 [日]

第208回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール/14時開演
Sunday Matinée Series, No. 208
Sunday, 29th July, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮/ルドヴィク・モルロー Conductor LUDOVIC MORLOT P.5

ピアノ/小曾根 真 Piano MAKOTO OZONE P.6

特別客演コンサートマスター/日下紗矢子
Special Guest Concertmaster SAYAKO KUSAKA

ガーシュイン **キューバ序曲** [約10分] P.10
GERSHWIN / Cuban Overture

ガーシュイン **ラプソディ・イン・ブルー** [約20分] P.11
GERSHWIN / Rhapsody in Blue

[休憩 Intermission]

ドビュッシー **牧神の午後への前奏曲** [約10分] P.12
DEBUSSY / Prélude à l'après-midi d'un faune

エネスコ **ルーマニア狂詩曲 第1番** イ長調 作品11-1 [約11分] P.12
ENESCU / Romanian Rhapsody No. 1 in A major, op. 11-1

ラヴェル **バレエ音楽〈ダフニスとクロエ〉第2組曲** [約18分] P.13
RAVEL / "Daphnis et Chloé", Suite No. 2

- I. 夜明け - II. パントマイム - III. 全員の踊り

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[共催] 東京芸術劇場 (公益財団法人東京都歴史文化財団)
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会



小林研一郎

(特別客演指揮者)

Ken-ichiro Kobayashi

炎のマエストロ

入魂のチャイコフスキー



©読響

読響が世界に誇る特別客演指揮者が、得意のチャイコフスキー作品から〈マンフレッド交響曲〉を披露。読響と取り上げるのは実に33年ぶりの勝負曲で、熟達の腕を振るい、情熱的な演奏に期待が高まる。同じく円熟

の極みにあるヴィルサラーゼとの共演も注目だ。

1940年福島県いわき市出身。東京芸術大学作曲科および指揮科を卒業。1974年第1回ブダペスト国際指揮者コンクール第1位、特別賞を受賞。ハンガリー国立響の音楽総監督をはじめ、チェコ・フィル常任客演指揮者、日本フィル音楽監督など国内外の数々のオーケストラのポジションを歴任。2002年5月の「プラハの春音楽祭」オープニングコンサートの指揮者に、東洋人として初めて起用されたほか、ハンガリー政府より民間人最高位の「星付中十字勲章」を

授与された。11年、文化庁長官表彰受賞。13年、旭日中綬章を受章。

現在、日本フィル桂冠名誉指揮者、ハンガリー国立フィルおよび名古屋フィルの桂冠指揮者、九州響の名誉客演指揮者、東京芸術大学、東京音楽大学およびリスト音楽院（ハンガリー）名誉教授。東京文化会館音楽監督、長野県芸術監督団の音楽監督を務めている。

録音の分野では、14年4月から読響と取り組んだブラームスの交響曲全集が絶賛を博している。

◇7月5日 定期演奏会

ルドヴィク・モルロー

Ludovic Morlot

フランスの俊英が

お国ものでオケをドライブ



©Lisa-Marie Mazzucco

昨年ベルリン・フィルへのデビューを飾ったフランスの俊英が、読響の指揮台に初登場。フランス近代音楽の代表作、バレエ音楽〈ダフニスとクロエ〉第2組曲などでその実力を発揮する。クラシック音楽の可能性を広げた

バラエティ豊かなプログラムで、どんな多彩な響きを聴かせてくれるだろうか。

1973年フランスのリヨン生まれ。イギリスの王立音楽アカデミーと王立音楽大学で指揮を学ぶ。2001年にタングルウッド音楽センターで小澤征爾のフェローシップ・コンダクターを務め、04年から07年までボストン響のアシスタント・コンダクターに任じられた。12年から14年までベルギー王立モネ歌劇場の首席指揮者を務め、11年からはシアトル響の音楽監督の任にある。これまでにロイヤル・コンセルトヘボウ管、シカゴ響、ニューヨーク・フィル、ウィーン響、シュターツカペレ・ドレスデ

ン、フランス国立管、チェコ・フィル、バーミンガム市響などに客演したほか、12年にはサイトウ・キネン・フェスティバル松本の20周年記念演奏会に招かれ、好評を博した。今年3月にはベルリオーズ〈ペアトリスとベネディクト〉でシアトル・オペラにデビュー。8月には、BBCプロムスとエディンバラ音楽祭へ出演することが決まっている。古典から現代まで幅広いレパートリーを誇り、デュティユーをはじめデイヴィッド・ラング、ジョン・ルーサー・アダムズら現代作品を積極的に演奏している。

◇7月28日 土曜マチネーシリーズ
◇7月29日 日曜マチネーシリーズ



©Nikolai Puschilin

ピアノ エリソ・ヴィルサラーゼ

Piano Elisso Virsaladze

ロシア・ピアノリズムを現代に継承する世界的巨匠。ジョージア生まれ。20歳でチャイコフスキー国際コンクール第3位入賞、24歳でシューマン国際コンクール優勝を果たしたほか、旧ソ連の権威ある芸術賞を多数受賞。バルチャイ、コンドラシン、サヴァリッシュ、テミルカーノフ、K.ザンデルリンク、ムーティら巨匠の指揮で、フィルハーモニア管、サンクトペテルブルク・フィルなど世界の一流楽団と共演している。モスクワ音楽院、ミュンヘン音楽大学常任教授。主要な国際コンクールの審査員も務めている。

◇7月5日 定期演奏会



©篠山紀信

ピアノ 小曾根 真

Piano Makoto Ozone

ジャンルを超えて活躍するジャズ界の革命児。1983年パークリー音楽大学ジャズ作・編曲科を首席で卒業。同年、アルバム「OZONE」で全世界デビュー。2003年にグラミー賞にノミネート。世界的ジャズ・プレイヤーと公演を行うほか、クラシックでも北ドイツ放送響、サンフランシスコ響などと共演。昨年、ギルバート指揮ニューヨーク・フィルとの〈ラプソディ・イン・ブルー〉で絶賛され、今年は同曲でシカゴ響と初共演する。読響とはカンブルラン、山田和樹の指揮で共演歴がある。文部科学大臣賞受賞、紫綬褒章受章。

◇7月28日 土曜マチネーシリーズ

◇7月29日 日曜マチネーシリーズ

7.5 [木]

柴辻純子 (しばつじじゅんこ)・音楽評論家

ベートーヴェン ピアノ協奏曲 第1番 ハ長調 作品15

作曲：1793年～1795年（1800年改訂、最終稿）／初演：1795年3月29日、ウィーン／演奏時間：約36分

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）は1792年、ハイドンのもとで作曲を学ぶため、ボンの宮廷楽団の職を辞してウィーンに移り住んだ。意気軒昂な若者はこの時期、様々な作品を試みている。チェンバロ協奏曲、ヴァイオリン協奏曲ハ長調（断片）、2曲のピアノ協奏曲、散逸したオーボエ協奏曲など、多彩な編成の協奏曲が集中している。協奏曲は、作曲の勉強において楽器法や大規模な編成の取り扱いの習熟の場でもある。ベートーヴェンの取り組みも、来たるべき交響曲の作曲に向けての準備だったのかもしれない。

ピアノ協奏曲第1番は、ウィーンに移住した翌年に着手され、1795年3月にブルク劇場でベートーヴェン自身のピアノ独奏で初演された。その後も、再演

と改訂が繰り返され、1800年に最終稿が完成した。そのため、かつては第2番と混同されたこともあった第1番の複雑な成立過程は、20世紀後半の綿密な研究調査によって明らかになった。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ、ハ長調 協奏風ソナタ形式。管弦楽の提示に続いて、優雅な第1主題と柔和な第2主題が独奏ピアノに現れる。ベートーヴェンは、内容と規模の異なる3種類のカデンツァを書き残している。

第2楽章 ラルゴ、変イ長調 独奏ピアノの優美な主題を木管の温かい響きが支える。変ホ長調の中間部では夢想的な表情を見せる。

第3楽章 ロンド、アレグロ、ハ長調 躍動的なロンド主題が繰り返される。その間に挟まれるイ短調のリズミカルな旋律が印象的である。

楽器編成／フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

チャイコフスキー マンフレッド交響曲 作品58

作曲：1885年／初演：1886年3月23日（ロシア暦11日）、モスクワ／演奏時間：約57分

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）は、6曲の番号付き交響曲を残しているが、それとは別に標題交響曲を1曲書いている。イギリスのロマン派の詩人バイロン（1788～1824）の詩劇に着想を得た〈マンフレッド交響曲〉は、第4番と第5番の交響曲の間にあたる1885年に、ロシア国民楽派「五人組」の作曲家バラキレフからの提案を受けて作曲された。

もともとその構想は、20年ほど前にバラキレフが、五人組の精神的支柱とされた音楽評論家スターソフから持ちかけられたものだった。1867年末から翌年にかけて、ベルリオーズがロシアを訪問した際、彼の作品が紹介されたが、なかでも作曲家自身が指揮したバイロンの長編詩に基づく〈イタリアのハロルド〉は多くの音楽家たちの関心を集めた。スターソフはすぐに、同様の題材の作品をロシアでも作るべきと考え、『マンフレッド』に目をつけ、自ら交響曲の各楽章に物語を割り振り、バラキレフに作曲を持ちかけた。しかし、バラキレフはあまり乗り気ではなく、ベルリオーズ本人に作曲を依頼したものの、体調の悪化を理由に断られた（ベルリオーズは1869年

に亡くなった）。以後、作曲されることはなく放置されていたが、チャイコフスキーがある用事でバラキレフに手紙を送ったことをきっかけに、バラキレフは昔の計画を思い出し返信した。

「あなたの才能の頂点は〈テンペスト〉と〈フランチェスカ・ダ・リミニ〉に見られます」（1882年10月）。1870年代に初演された二つの管弦楽のための幻想曲を手紙のなかで褒め、さらに「私が用意した題材」で新たな曲を書かないかと、内容は明かさず打診してきた。それにチャイコフスキーが関心を示すと、『マンフレッド』の構想プログラム（かつてスターソフがバラキレフに提案したものに大幅に手を入れた）を送ってきた。

チャイコフスキーは、シューマンの劇付随音楽〈マンフレッド〉を意識し、作曲に踏み切れずにいると、バラキレフはさらに、各楽章の調性の指定や主題の特徴など、細かな部分まで指示を書いてきた。それでも着手できず、ようやく1885年4月から構想を練り始める。バラキレフの指示はほとんど採用せず、自身の創作として同年9月に完成させた。作曲中、ソプラノ歌手への手紙に「とても複雑な標題ゆえに手

がかかりました」と書いたが、1886年の初演直後、パトロンのメック夫人に宛てて「これは、私の交響作品のなかで最も優れたものだと思います」と送り、自信をのぞかせた。

アルプスの山中に城を構える城主マンフレッドは、救いがたい虚無感と絶望感に苛まれている。宿命や罪深い過去の記憶。楽譜に記された標題の概要を記しておこう。「第1楽章：マンフレッドは、人生に疲れ果て、アルプスの山中をさまよっている。自ら命を絶った恋人アスタルテの思い出が彼の胸を締め付ける。第2楽章：滝のしぶきにかかる虹のもと、マンフレッドの前にアルプスの精霊が現れる。第3楽章：パストラレー（牧歌）。山人たちの素朴で、のどかな生活。第4楽章：アリマネスの地下宮殿。地獄の酒宴にアスタルテの亡霊が現れ、マンフレッドは許され、苦悩に満ちた生涯を終える」。

第1楽章 レント・ルグーブレ、ロ短調 全体は、速度標語の異なる四つの部分から成る。開始の低音の木管による重苦しいマンフレッドの主題、続く弦楽器の哀しみに満ちた主題は、楽曲全体で何度も現れる。低音でうごめく音型も加わり、劇的な高まりをみせる。後半（アンダンテ）ではヴァイオリンに穏やかなアスタルテの主題が現

れ、ハーブを伴ったマンフレッドの愛の告白の旋律が続く。大きな高まりを経て、マンフレッドの主題を含む情熱と悲劇が渦巻く第4部に進む。

第2楽章 ヴィヴァーチェ・コン・スビーリト、ロ短調 妖精が軽やかに舞うかのように、管楽器が弦楽器の合間をぬっていく。中間部（ニ長調）は、優美な主題がヴァイオリンから様々な楽器に受け継がれる。

第3楽章 アンダンテ・コン・モート、ト長調 オーボエの甘美な旋律で始まり、弦楽器の清らかな主題が美しい流れを作り出す。のどかな情景が浮かぶ緩徐楽章は、劇的な表現を含みながら、最後は *ppppp* の最弱音で終結する。

第4楽章 アレグロ・コン・フオーコ、ロ短調 冒頭の力強く上行する動機が、多くの楽器に現れる。バッカスの神の宴が収まると、ゆっくりとした部分に入り、金管が高らかに響き、マンフレッドの主題が再現される。主題の対位法的な処理を経て、音楽に激しさが戻ってくる。再び静かになると、マンフレッドの主題が木管で再現され、弦楽器によるアスタルテの主題がハーブのグリッサンドとともに現れる。やがて第1楽章の第4部が再現され、最後は低音の「怒りの日」によって、マンフレッドの死が暗示される。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、タンブリン、シンバル、サスペンデッド・シンバル、大太鼓、銅鑼、鐘）、ハーブ2、オルガン、弦五部

7.28 [土]

7.29 [日]

飯尾洋一 (いいお よういち)・音楽ライター

ガーシュイン キューバ序曲

作曲：1932年／初演：1932年8月16日、ニューヨーク、ルイゾーン・スタジアム／演奏時間：約10分

メンデルスゾーンの交響曲第4番〈イタリア〉やシャブリエの狂詩曲〈スペイン〉など、作曲家が旅をきっかけに書いた名曲は少なくない。ジョージ・ガーシュイン(1898～1937)の〈キューバ〉序曲もその一つ。

1932年、父モリスを亡くしたガーシュインは、予定されていたヨーロッパ旅行を断念し、代わりにキューバのハバナで短期間の休暇を過ごした。キューバ滞在中のガーシュインは、土地の音楽やキューバ人たちの楽器に興味を持ち、いくつか楽器を買い込んで、これらをオーケストラ曲に用いるアイデアを思いつく。ボンゴ、マラカス、キューバ・スティック(クラベス)、ギロといった打楽器群を活躍させ、カリブ色を前面に打ち出したこの作品を、ガーシュインは「キューバのダンスの精髓を母体とした交響的序曲」と形容した。

初演が行われたルイゾーン・スタジアムでのコンサートでは、全曲ガーシュインの作品が並べられ、1万8千席が売り切れて、なおも数千人が入場できなかったというほどの人気を呼んだ。初演時の曲名は〈ルンバ〉。しかし、この題では〈南京豆売り〉(アフロ・キューバンのスタンダードナンバー)のような曲が連想されてしまうという理由で、後に〈キューバ〉序曲の題に改められた。

曲は三部構成をとる。ラテン音楽のリズムで彩られた陽気にぎやかな主題で開始されるが、これはキューバのイグナシオ・ピニェイロ作曲のラテン・スタンダード〈エチャレ・サルシータ〉に題材を借りたもの。クラリネットの即興的なソロをはさんで、ゆったりとしたけだるい中間部に入る。次第に高潮し、ふたたび冒頭のラテンのリズムが回帰して、活発に曲を閉じる。

楽器編成／フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(シロフォン、グロッケンシュピール、小太鼓、ボンゴ、ギロ、マラカス、サスペンデッド・シンバル、ウッドブロック、大太鼓、クラベス)、弦五部

ガーシュイン ラブソディ・イン・ブルー

作曲：1924年／初演：1924年2月12日、ニューヨーク、エオリアンホール／演奏時間：約20分

1924年、兄アイラらとともにピリヤードに興じていたガーシュインは、新聞記事で「アメリカ音楽の実験」と題されたコンサートが開かれ、この公演のために「ガーシュインがジャズ風の協奏曲に取り組んでいる」と書かれていることを知る。コンサートの企画者は、ジャズ・バンドリーダーのポール・ホワイトマン(サンフランシスコ交響楽団他でヴァイオリニストを務めた経歴を持つ)。ラフマニノフやハイフェッツ、ジンバリストらの著名な音楽家が招かれて、アメリカ音楽とは何かを判定するという。

寝耳に水だったガーシュインはすぐにホワイトマンに電話をかけて、記事の真偽を確かめた。ホワイトマンからは、かねてよりジャズ風協奏曲の作曲を打診されていたものの、まさか新聞記事で自作の初演予定を知ることになるろうとは。記事を目にしたのは1月3日。コンサートはリンカーンの誕生日にちなんで2月12日に開かれる。1か月あまりのわずかな期間しかなかった。ガーシュインは汽車に揺られながら、騒音のなかで作品全体の構想を練

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン3、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、アルトサクソフォン2、テナーサクソフォン、ティンパニ、打楽器(小太鼓、サスペンデッド・シンバル、シンバル、グロッケンシュピール、トライアングル、大太鼓、銅鑼)、弦五部、独奏ピアノ

りあげて、これを「アメリカの音楽的万華鏡」として思い浮かべたという。曲は2台のピアノ用にかかれ、ホワイトマン楽団のアレンジャーであったファーディ・グローフェがオーケストレーションを担当した。

当初「アメリカン・ラブソディ」と題された作品は、アイラの案で〈ラブソディ・イン・ブルー〉と名付けられることとなった。公演当日は全23曲中の22番目に演奏され、長時間の公演に退屈していた聴衆たちの目を覚まさせたと伝えられる。批評は賛否両論で、作品がもたらしたインパクトの大きさを物語っている。初演時にはジャズ・バンド向けの編成で演奏されたが、後にグローフェが通常のオーケストラ向けに編曲した。

曲の冒頭、クラリネットのしゃくりあげるようなグリッサンドが特徴的だが、これは練習で奏者が気まぐれに行った戯れを、ガーシュインが気に入って採用したもの。ジャズのスタイルにもとづく即興的なピアノ・ソロを交えながら、華麗な楽想が次々と湧き上がってくる。

ラヴェル

バレエ音楽〈ダフニスとクロエ〉第2組曲

作曲：1909～1912年／初演：1912年6月8日、パリ、シャトレ劇場（原曲のバレエ版）／演奏時間：約18分

20世紀初頭、バレエ・リュス（ロシア・バレエ団）の辣腕プロデューサーであるセルゲイ・ディアギレフは、モーリス・ラヴェル（1875～1937）をはじめ、ストラヴィンスキーやドビュッシー、サティらの作曲家たちに新作を依頼し、パリで大きな成功を収めた。ラヴェルが作曲したのは〈ダフニスとクロエ〉。紀元3世紀頃のギリシャの作家ロンゴスの田園ロマンスを題材に、バレエ・ダンサー兼振付師のミハイル・フォーキンが台本を担った。

ラヴェルは1909年より作曲にとりかかったが、フォーキンとの共同作業は難航し、台本にも満足できなかったことから完成が遅れ、ディアギレフは企画全体をキャンセルしようかと悩んだほどだったという。しかし、ようやく1912年にスコアが完成すると、ニジンスキーとカルサヴィナの主演によって初演された。

ロンゴスの原作で描かれるのは、山羊飼いの少年ダフニスと羊飼いの少女クロエの恋の目覚めとその成就。互いにひかれあう幼なじみの二人が、恋敵や海賊との争いに行く手を阻まれるも

の、やがて結ばれるという甘酸っぱいラブストーリーである。ただし、ラヴェルの作曲プランは「古代趣味に心を砕くのではなく、むしろ19世紀末のフランスの画家たちが想像力を駆使して描いたものに似た、音楽の巨大なフレスコ画」にあった。

ラヴェルはこのバレエから二つの組曲を作った。第2組曲はバレエの第3場の音楽の大半がそのまま使用され、「夜明け」「パントマイム」「全員の踊り」の各部分から構成される。

「夜明け」 精妙なオーケストレーションにより、次第に日が昇る様子が表現される。ピッコロ、フルート、ヴァイオリンが鳥のさえずりを思わせる。ダフニスは海賊にさらわれていたクロエと再会を果たす。

「パントマイム」 ダフニスとクロエがパン（牧神）とニンフに扮して無言劇を踊る。ドビュッシーの〈牧神の午後への前奏曲〉と同様に、フルートがパンの笛を想起させる。

「全員の踊り」 脈打つようなリズムとともに喜びを爆発させ、壮麗なクライマックスを迎える。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、ピッコロ、アルトフルート、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、小太鼓、テナードラム、トライアングル、タンブリン、カスターネット）、ハープ2、チェレスタ、ジュ・ドゥ・タンブル、弦五部

ドビュッシー

牧神の午後への前奏曲

作曲：1891～1894年／初演：1894年12月22日、パリ、国民音楽協会／演奏時間：約10分

象徴派詩人ステファヌ・マラルメは、自作の『牧神の午後』を舞台上演するために、クロード・ドビュッシー（1862～1918）に音楽を依頼した。舞台上演の計画は立ち消えとなってしまったが、ドビュッシーは〈牧神の午後への前奏曲〉を作曲する。当初、作品は三部作として構想され、前奏曲に間奏曲とパラフレーズが続く予定だったが、この前奏曲のみが書きあげられ

た。初演は圧倒的な成功を収め、規則で禁じられていたにもかかわらずアンコールが行われた。

曲は、パン（牧神）の笛を思わせる無伴奏のフルートで開始される。真昼に岸辺でまどろむ牧神が、水浴びするニンフ（水の精）を追い回すが、やがて疲れて陶然と眠りに身を任せる。気だるく官能的な音楽が、夢や幻影のようにはかなく揺れ動く。

楽器編成／フルート3、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、打楽器（クロティル）、ハープ2、弦五部

エネスコ

ルーマニア狂詩曲 第1番 長調 作品11-1

作曲：1901年／初演：1903年3月、ブカレスト／演奏時間：約11分

ジョルジュ・エネスコ（1881～1955）はルーマニアに生まれ、パリで活躍した作曲家、ヴァイオリニスト。交響曲やオペラ、室内楽曲など幅広いジャンルに作品を残しているが、もっとも広く知られるのは、20歳で書かれた初期の作品、ルーマニア狂詩曲第1番だろう。民謡由来の親しみやすい旋律により、少年期からヴァイオリニストとして活動していたエネスコの名を作曲

家としてヨーロッパに広めることに貢献した。質朴としたルーマニアの民俗音楽が、色彩的なオーケストレーションによって華やかに生まれ変わった。

冒頭のゆったりとした主題は、ルーマニアの民謡「金があるから酒を飲む」から取られたもの。民俗舞曲風の楽想が次々と現れ、終盤では民謡「チョクルリア（ひばり）」が登場して熱狂的なフィナーレを迎える。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（サスペンデッド・シンバル、小太鼓、トライアングル）、ハープ2、弦五部